光明寺だより

第105号
浄土真宗本願寺派
光明寺

〒793-0030　西条市大町550
TEL 0897-53-4583

心に残る詩

どこまでも

君に上がれない
坂はない
君に登れない山はない
なぜなら君の悲しみが
君を押すから
君の苦しみが
君を頑張らせるから
君はどこまでも
上がって行ける
君はどこまで
登っていける
君の悲しみを燃やして
君の苦しみを燃やして

ご案内

親鸞聖人御誕生８５０年
立　教　開　宗８００年
慶讃法要

法要期日

２０２３（令和５年）

第１期	３月29日（水）～４月３日（月）
第２期	４月10日（月）～４月15日（土）
第３期	４月24日（月）～４月29日（土）
第４期	５月６日（土）～５月11日（木）
第５期	５月16日（火）～５月21日（日）

一口法話

同悲同苦の心

お釈迦さまは、私たちが人間としてこの世に生まれた限り、避けて通ることの出来ない苦しみが八つあるとお示しくださいました。

その一つに「愛別離苦（あいべつりく）」という苦しみがありますと仰っています。

「愛別離苦」とは、愛する人、親しい人、大切な人、そういった方と、お別れせねばならぬという苦しみです。それが何時どんな形でやってくるかも分からないけれども、人間として生まれた限りその苦しみは避けては通れません、とこう仰っています。

この苦しみは誰もが知っているつもりですが、いざそれが我が身に降りかかってきますと、どうしようもない深い悲しみを感じさせられるものです。

俳人の松尾芭蕉にこんな逸話が残されています。

芭蕉の友人がかけがえのない一人息子を亡くしたのです。そこで、芭蕉は一通のお悔（く）やみの手紙を出しました。

友人がその手紙の封を切ってみたところ、全くの白紙で何も書かれていません。ただ、手紙の最後に俳句が一句したためられてあったのです。

友人は、その何も書かれていない白紙の手紙をじっと眺め、最後の一句を静かに読み終えたと思うと、深くうなずきながら「持つべきものは心の友だ。あぁ、ありがたいなぁ」と涙と共に、お念仏を申したそうであります。

芭蕉にしてみれば、友人の心中を察すれば察するほど、その痛ましさに、お悔やみの言葉も慰めの言葉も書くことが出来なかったのです。

「辛いだろうね。悲しいだろうね。だけど私には君をなんと慰めていいのか言葉が見つからないんだよ」と、芭蕉は自らの気持ちを白紙の手紙に託し、万感の思いを込めて一句添えたのです。

その時の句が、

埋火（うずみび）も　消ゆや　涙の烹（に）ゆる音

というものであります。

夫婦二人っきり火鉢に向かい合い、ただ言葉もなく、帰らぬ子を思っては深いため息と共に涙をこぼす。

その涙が火鉢の埋火（うずみび）の上にポトリポトリ落ちて、ジュッ、ジュッと涙の烹（に）える音だけが聞こえてくる。そのほかに何の音もない。

埋火（うずみび）も　消ゆや　涙の烹（に）ゆる音

たまらない寂しさ。この上もない悲しさ。「分かるよ、分かるよ。君の苦しみが本当に分かるよ」、共に涙する芭蕉の、それが出来る精一杯の慰めだったのです。

私は、芭蕉のこの心こそが、み仏の「同悲・同苦」と呼ばれるお心に相通ずるものを感じるのであります。

「同悲・同苦の心」とは、この世に涙するものに寄り添い、共に悲しみ、共に苦しみ、共に涙する心であります。

阿弥陀さまの慈悲の源は、まさにこの「同悲・同苦の心」にあります。

親鸞聖人は

如来の作願をたずぬれば
苦悩の有情をすてずして
回向を首としたまいて
大悲心をば成就せり

『正像末和讃』

と詠われました。

阿弥陀さまが「安心せよ、必ず救うぞ」となぜ本願を起こされたのか。

それはこの世に涙する者（苦悩の有情）をどうしても見捨ててはおけないという「同悲・同苦の心」によるものですと、教えてくださったのです。

どうしても死なねばならない「いのち」を抱えている私がいるからこそ、必ず浄土に生まれさせてあげようという願いが起こされたのです。

どうしても別れねばならない「いのち」を抱えている私がいるからこそ、再び会うことの出来る世界をもたせてあげようという願いが起こされたのです。

そのみ仏の願いの底に流れるものは、唯々悲しみに沈む衆生が哀れでならないという「同悲・同苦の心」なのです。

そうです、私のこの悲しみが、この涙が、み仏の大悲心を生み出したのであります。決してその涙は無駄ではなかったのです。その涙こそ、み仏の大悲のお心に出遇う尊いご縁だったのです。

しかも、死への旅路であった人生が、浄土への旅路であったのだと気づかせて頂けるのです。

永遠に別れねばならなかった悲しみが、再び出遇える喜びの人生に転じさせて下さるのです。

もし今、深い悲しみに沈んでいらっしゃる方がおられるのなら、どうかこの悲しみをご縁として、涙した者でなければ分からない尊いみ教えに出遇って下さい。そして、この悲しみこそがまことに大きな恵みであったと、心の底から頷いていけるような、そんな豊かで尊い人生を送って下さい。

それが阿弥陀さまの願いであり、先立っていった者の願いでもあるのです。

私たちのちかい

一、自分の殻に閉じこもることなく
穏やかな顔と優し良い言葉を大切にします
微笑み語りかける仏さまのように

一、むさぼり、いかり、おろかさに流されず
しなやかな心と振る舞いを心がけます
心安らかな仏さまのように

一、自分だけを大事にすることなく
人と喜びや悲しみを分かち合います
慈悲に満ちたみちた仏さまのように

一、生かされていることに気づき
日々に精一杯つとめます
人びとの救いに尽くす仏さまのように

五年程前のことですが、当時大町小学校（ｋ校長）の教頭をされておられたＯ先生という光明寺の檀家さんが、郷土愛を育てる授業の一環として、「郷土の偉人」を採り上げ、そこで、常真法師（光明寺六代目住職）のことを紹介していただきました。その授業で使われた教材を、お寺に持って来ていただきましたので、改めてご紹介いたします。

ー入江常真さんー

大町小学校の校歌にもある加茂川。春は桜がきれいな武丈公園。加茂川が一年中、きれいな水が流れています。みんなも大好きですね。

けれども、その加茂川が昔はたびたび水害を起こして、大町の人たちを苦しめたことを知っていますか。これからのお話は、今から四百年くらい前のお話です。

（今から四百年前）

「おーい。また加茂川の堤防が切れたぞー。」
「台風が来るたびに大町は水浸しじゃ。」
「せっかく一生懸命、コメを作ったのに。もう台無しじゃ」
「米だけじゃない。わしの家も水浸しじゃ」
「どうしたもんかのお。常真さん、何とかならんかのお。」

村人の話し合いの中に、新居浜に住んでいた常真さんも加わっていました。常真さんはお坊さんで、村人のいろいろな相談にも乗っていました。

常真さんは、じっと腕組みをして考えていましたが、やがて、「こんなにみんなが困っているんじゃ。私も何とかしたいとずっと考えていた。」

「常真さん、なんかええ考えがあるんか？」
「加茂川の流れを変えるんじゃ。大きな堤防を作って川が氾濫しないように・・・」
「そんなことできるんか？」
「わたしが、お殿様に頼んでみる。実は、わたしは殿様をよく知っているんじゃ。」
「頼んだぞ。常真さん。」
「けど、これは大工事になる。その時は、みんなの力も貸してくれるか？」
「常真さんには、これまでにもいろいろと相談に乗ってもらったり、助けてもらっている。しかも、これは自分たちの生活を守るためじゃ。どんなことでも協力する。」

大町の人たちは口々にそう言って協力を約束しました。

常真さんは、それから、この時西条を治めていた殿様に相談に行きました。殿様は常真さんの大町の人たち、いや西条の人たちの生活を守りたいという熱い思いに、加茂川の流れを変えるために堤防を築くことを約束しました。そして、今

までに堤防を築いてきた足立重信（あだちしげのぶ）にも協力を頼み、いよいよ加茂川の堤防工事が始まりました。

「常真さんは、米も野菜も作ってないのに、なんでいつも一緒に工事をしてくれるんじゃ。」

「そうじゃ、そうじゃ。常真さんは、新居浜に住んでいるのに。殿様に頼んでくれただけで感謝しとるのに。」

「いやいや、この加茂川は、大町の人にとっても大切じゃが西条、いやいや新居浜の人にも大切な川じゃ。それに、みんなと一緒に工事ができることがうれしいんじゃ。さあさあ、みんな、もうひとふんばりがんばろう。」

常真さんをはじめ、大町の人たちも一生懸命、この堤防造りの仕事を行い。そして、みごとに完成させました。加茂川は、今のように氾濫しないみんなの生活を守る流れの川に変わりました。

それから、常真さんは、新居浜から西条の大町に移り住むようになりました。常真さんは、お坊さんなので、この大町にお寺を作りました。その当時のお寺は、今の公民館や集会所、学校の役割もしていました。

常真さんは、きっと、毎日のように、大町の人たちと、いろいろな話し合いをして、みんながよりよい生活ができるように努力したのだと思います。

さて、常真・・・常真・・・常心。

どこかで聞いたことありませんか？

そうです。大町校区にある常心という地名は、実は、この常真さんを、いつまでも忘れないようにとつけられた地名なのです。

常真さんの功績をしのんで、今も、記念碑が建てられています。

ちょうど、常真さんたちが力を合わせて作り上げた堤防のところにあります。

みなさんの住んでいる大町校区には、常真さんのように、地域のために努力をした方々がたくさんいます。

今、みんなが大町で元気に幸せに暮らしているのは、このように昔の人たちが努力したおかげだと思いませんか？

（注）市内の小学校では、以前から郷土の偉人のおはなしなどを通して、郷土への誇りを育む授業が行われてきました。そんな郷土の偉人に、よく常真のことが採り上げられたと伺っています。

趣味の広場

俳句を楽しむ（八十）

森本隆を

今年は、気が付いたらはや師走、というようなそんな一年でしたね。コロナウイルスの勢いはおさまるどころか拡大する一方で、結局、コロナのニュースに振り回され通しで、これを書いている今は松山市を中心に愛媛でも連日コロナ新感染が多く、日常の暮らしにもずい分影響が出てきています。旅行はもちろん外出も控えめな毎日です。これからいよいよ寒い季節、そして何末年始のあわただしい時期を迎えます。前号では、夏の暮しの中で時代の進行につれて余り見かけなくなったものとか今となっては懐しいものなどを季語の中に探して何句か鑑賞してみました。今号では冬の私たちの生活をよく見て、近頃これは見なくなったなあ、と思うようなものやことを俳句の中で探ってみます。

火を入れしばかりの火鉢縁つめた　星野　立子

足袋あぶる能登の七尾の駅火鉢　細身　綾子

炭ついでしばらく寒き火鉢かな　岡本　圭岳

人逝きてその湯たんぽの行方なし　皆吉　爽雨

湯婆の位置かはらずに睡りをり　相馬　妙花

火鉢そのものはご存知の方はまだまだ数多くおられると思いますが、毎日の暮しの中で今も使っているという方はほとんどないかと思われます。今や、火鉢に代わって大いに使われた電気や石油ストーブももうだいぶ減って暖房の主役はエアコンになっていますね。火鉢など使ってみたいと思ってもそのためには炭が必要で、またその炭がけっこう高価で、まず使うことが出来ません。また、昔は寝る時に布団の中の足元の方に湯婆を使ったものです。陶製かブリキ製で亀の甲の形をし、中に湯を入れ、布製の袋に入れて使うのですが、寒い夜、とても重宝でした。そのほか、「炭」、「炭火」、「消し炭」、「炭俵」など、かつては我々の冬の暮しをささえた熱源として炭はとても大切な物でした。

話すことなくとも楽し炭をつぐ　木村定生

炭俵ゆるびゐて炭をこぼさざる　後藤比奈夫

家の中での暖は炭でとり、家の外では冬の間よく焚火をしたものです。今は防火意識が強くて焚火は法的にも禁じられているようです。昔は火事も多かったようで、「火事」も冬の季語となっています。

今思えば皆遠火事の如くなり　能村登四郎

火事跡を覗いてゐたりランドセル　小林まどか

火事も多ければその対策として町内の火の番をする人や、いざ火事となると人々に知らせる鐘を打つための半鐘台という高い塔の様なものもありました。「火の番」も季語です。

火の番の歩数を越ゆる星の数　増田　守

寒柝に幼き声のまじりをり　佐藤　健

「寒柝」は火の番をして町内を回る人が拍子木を打つその音でこれも冬の季語です。

ふところに智恵子抄あり懐手　山内　星水

賛成の出来ぬ話や懐手　斉藤　浩美

和服を着る時、寒いので袂や胸に両手をさし入れたままでいるのを「懐手」といい、やはり冬の季語です。人によっては懐手をしていると粋な男性だと思われると信じていた様です。和服を着る男性がもうほぼいませんから、懐手の渋い男など見かけるはずもありません。近頃大活躍の俳人夏井いつきさんによれば今日例にあげた季語はほとんど絶滅寸前の季語だそうです。「ひび」、「あかぎれ」も含め、現代生活では影をひそめました。

いよいよ厳寒、皆様ご自愛下さい。

職書作品

【字句】雨聲囪外歇（まどやむ）

BOOK　本

発行所　致知出版社
著　者　白駒妃登美
定　価　1500円（税込）

「歴史を学ぶということはそれぞれの時代に生きた人々の思いを繙（ひもと）き、彼らが未来に生きる私たちにどんな思いを託したのかその先人からのメッセージを受け取ること」だと、筆者は語っています。

本書を出版されてから、小中学校で歴史の授業や講演をする機会が増えたそうですが、本書は子どもたちの心に特に響いた話や、美しい国柄を守るために、これだけはどうしても伝えておきたいと思う話を十五編厳選し、収録しています。

本書を通して、日本の歴史や文化について理解を深めていただければ、自分が日本人であることに誇りを持てる、そんな一冊です。

光明寺のホームページ

南岳山光明寺　検索

令和３年度年忌早見表

該当のお家には年忌通知表をお配りしていますが、念のため早見表を参考にご自宅の過去帳でご確認ください。

回忌	死亡の年号
1周忌	令和2年
3回忌	令和元年 平成31年
7回忌	平成27年
13回忌	平成21年
17回忌	平成17年
25回忌	平成　9年
33回忌	昭和64年 平成元年
50回忌	昭和47年
66回忌	昭和31年
100回忌	大正11年
150回忌	明治　5年
200回忌	文政　5年
250回忌	安永　元年
300回忌	享保　7年

言葉のプレゼント

私たちの抱（かか）えるどんな問題も
人間が作り出したものだ
それゆえ
人間の手で解決することが出来る

ジョン・F．・ケネディー

「光明寺だより」をご家族の皆さんでお読みください

★次回発行予定…2月中旬

話題

★住職が中咽頭がんの診断を受け、十月末に愛大付属病院で手術をしました。手術は無事成功し、半月余り入院した後、現在は日常生活が送れるまで回復しています。

★コロナウイルスの第３波の感染拡大が危惧されています。そのため本年の「報恩講」・「除夜の鐘」は中止させていただきます。このような状況が続くようであれば、３月の涅槃（おねはん）会も中止せざるを得ないかもしれません。次号の「光明寺だより」でお知らせいたします。

★住職の長男（光（ひかる））が７月23日、無事満２歳を迎えました。大変穏やかな性格で、明るい子です。

★令和５年３月～６月・親鸞聖人ご誕生八百五十年・立教開宗八百年の「慶讃法要」が本山で勤まります。

（＊関連記事１ページ）